

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER



INAX MUSEUMS

vol. **51** JUN. 2020

特集 **次の時代へ、残すべきもの**
— 旧郵船ビルディングのテラコッタが語りかけること
Feature Story
A Legacy to Future Generations: Terracotta from the Old Yusen Building



1	2	3
4		5

[表紙写真]

- 1・2 陶楽工房前
3・5 「私が選ぶ、INAXライブ
ミュージアムの『名品』」
4 窯のある広場・資料館

03 特集 次の時代へ、残すべきもの —旧郵船ビルディングのテラコッタが語りかけること Feature Story A Legacy to Future Generations: Terracotta from the Old Yusen Building

08 *Live* Coming next これからの催し 古便器コレクション「デザイン性豊かな昔の便器」 Antique Toilet Collection: Historical Toilet Bowls and Their Vibrant Designs

陶楽工房の新メニュー「グランツ・モザイク」
Glanz Mosaic: A new program at the Tiling Workshop

テラコッタパーク 新展示
New acquisitions at Terracotta Park

09 *Live* Report 開催報告

REPORT 01 光るどろだんご大会2019 中部地区大会
"Hikaru Dorodango" Making shiny clay balls Central Japan championship 2019

REPORT 02 第10回「陶と灯の日」
The Tenth Pottery and Lamp Day

REPORT 03 「れんがDE どーもくん!」巡回展示
Traveling Exhibition with a Brick Rendition of NHK's Domo-kun

REPORT 04 窯のある広場・資料館 オープニング記念式典
Opening Ceremony of the Kiln Plaza

REPORT 05 窯のある広場・資料館リニューアル記念 企画展
大「名品」展—タイル・テラコッタ・古便器・土管のコレクション
Objet d'art collection—tiles, architectural terracotta, and assorted ceramic wares

REPORT 06 お酢を使って「スケルトン玉子」をつくろう
Let's make naked eggs using vinegar!

REPORT 07 光るどろだんご全国大会2019・どろだんごEXPO at セントレア
"Hikaru Dorodango" Making shiny clay balls National championship 2019

REPORT 08 企画展関連イベント 講演会&館内ツアー
私が選ぶ、INAXライブミュージアムの『名品』
Lecture and tour of the exhibition: "My selection of the very best from INAX Museums collection"

REPORT 09 世界トイレの日特別企画
「トイレはどこ? at INAXライブミュージアム」
Special event for World Toilet Day: "INAX Museums' 'Where Are the Toilets?' Event"

10

11

ライブミュージアムに吹く風 Fresh perspectives at INAX MUSEUMS

8



トイレが世界を救う

Toilets will save the world



今年1月、LIXILの衛生陶器工場である榎戸工場に最も近い常滑市立鬼崎南小学校の4年生に「常滑に生まれ、常滑とともに育つLIXIL」と題して出前授業をしてきました。小学生たちには、平安時代にやきものの甕や壺を作り始めた常滑では、江戸には急須などの茶器を作り、明治になると土管、そして大正から昭和にかけてタイルを作り始めるなど、人の生活になくてはならないやきものを作り続けていることを説明しました。そして、現在常滑で最も生産量の多いやきものはトイレであり、トイレもとこなめ焼と説明し、とこなめ焼が日本の生活を豊かにしていると話しました。そして現在LIXILでは、未来に向けて世界中の衛生環境の改善に向けて取り組みを始めており、20億人ともいわれているトイレの無い人たちへ向けた支援活動について紹介し、トイレで世界を救いたいと結びました。子どもたちの真剣な眼差しが、とても印象的でした。

後藤 泰男 (主任学芸員)

In January 2020 I visited Onizaki Minami Elementary School, the public school closest to LIXIL's Enokido Plant in Tokoname, where ceramics for bathrooms are produced. I gave a talk to children in the fourth grade titled "LIXIL: Born and Raised in Tokoname." Pottery for daily life has been produced in Tokoname since the twelfth century. Today toilets account for the largest share of pottery production in the city. I was impressed by their serious expressions when I told them that two billion people around the world live in places without toilets and described how LIXIL is working to change this.

Yasuo Goto, chief curator of INAX Museums

特集

次の時代へ、残すべきもの

Feature Story

**A Legacy to Future Generations:
Terracotta from the Old Yusen Building**

藤森 照信氏インタビュー

旧郵船ビルディングの テラコッタが 語りかけること

2020年初夏、旧郵船ビルディング（〒923-1976 東京都千代田区丸の内：以下 郵船ビル）の外壁を飾っていた壺型のテラコッタが、INAXライブミュージアム「テラコッタパーク」の新しい仲間になります。
アメリカ製の2基のテラコッタは、私たちに何を語ってくれるのでしょうか。



郵船ビルは、建築史家 村松貞次郎が「日本における最も優れたアメリカ式オフィスビル」と称した建築です。1975（昭和50）年、建て替えのために取り壊される際、村松は建築記録を作成して後世に残すことと、建物の一部保存を申し入れました。

そして2基のテラコッタが新しい郵船ビルの外構に設置されましたが、このたび、移設から40年以上が経ち劣化していくテラコッタの移転先を検討していた日本郵船株式会社から、INAXライブミュージアムが譲り受けることになったのです。

解体に際して作成された建築記録には、「郵船ビルは、大量化、均質化、合理化があらゆる面にわたって貫かれていた」とあります。記録を作成したのは、当時、東京大学大学院生だった建築史家・建築家の藤森照信氏です。

藤森氏に、郵船ビルの建築的特徴と、合理化が求められた建築になぜテラコッタが使われていたのかなど、お聞きしました。

聞き手：

INAXライブミュージアム 主任学芸員 後藤 泰男



旧郵船ビルディング 正面入り口

イギリス式からアメリカ式オフィスビルへ

—— 郵船ビルが竣工した大正12(1923)年頃、日本の建築界はどんな状況だったのでしょうか。

藤森 日本経済も良くなって、オフィスビルの需要が大きく伸びていた時代です。明治27(1894)年の三菱一号館竣工から始まるイギリス式の赤煉瓦ビルは、明治後半にかけて東京丸の内一帯に「一丁ロンドン」と呼ばれるオフィスビル街をつくり上げました。

大正3年の東京駅のオープンを機に、皇居と東京駅をつなぐ大通りが整備され、三菱地所は、この通りに沿って一丁ロンドンより合理性の高い一歩進んだビル街を計画しました。「一丁ニュー^{そ ね ちゆうよう}ヨーク」と呼ばれ、その第一号が旧東京海上ビルです。設計は曾禰中條建築事務所で、構造は鉄筋コンクリート造、新しいスケールの街の誕生を告げました。しかしながら、このビルの施工には4年半もかかりました。

こうした状況の中で、郵船ビルと共に旧丸の内ビルディング(以下丸ビル)の計画が始まっていました。郵船ビルは日本郵船株式会社をオーナーとし、東京海上ビルと同じ曾禰中條建築事務所の設計で進められることになりました。一方、丸ビルは三菱合資会社をオーナーとし三菱地所部の設計です。問題は施工で、丸ビルの予定面積は東京海上ビルの4倍に及びましたから、旧来の施工でいくと18年もかかってしまう計算になった。

——時代は、「施工のスピード」を求めたのですね。

藤森 丸ビルの設計を行う三菱地所部の技師長 桜井小太郎は、なんととも18年を2~3年に短縮しなければならなかった。この難問を前にしたとき、機械力を駆使して摩天楼と呼ばれる高層ビルを信じられない速さで建ててしまうアメリカに目が向きました。その結果、丸ビルと郵船ビルを建設するためにニューヨークからフラー社がやってくるようになったのです。

フラー社の施工 —— 機械化と合理的な現場管理

——丸ビルと郵船ビルは同じ会社が施工したわけですね。

藤森 曾禰中條建築事務所を開設した曾禰達蔵は、事務所開設前は三菱の技師で、当時は三菱の建築顧問をしていました。丸ビルの構造設計を担当した三菱地所の技師 山下寿郎が大正6年にアメリカの建築事情の調査を命じられ、渡米した際にフラー社とのパイプができた。その2年後の大正8年に日本郵船社長の近藤廉平とフラー社社長が会見して、丸ビルと郵船ビルの施工をフラー社が行うことになりました。

——フラー社は、どんな施工をしたのですか？

藤森 ニューヨークに本社を置くフラー社は、鉄骨造による超高層オフィスビル群の実績を数多く持つ米国の建設会社でした。両ビルも鉄骨造で設計され、施工は日本にはなかったクレーン(ガイデリック)やトラックなど、機械力を駆使したアメリカ式の合理的な方法で行われました。人力によるそれまでの造り方に比べて経済的で、工期も大きく短縮できました。

当時はゼネコンが施工管理をする方式ではなく、日本郵船の直営でしたが、社内に施工管理できる部署がありません。そこで、フラー社が現場で必要な職人や労働者の数を指示し、曾禰中條建築事務所が手配したそうです。材料もそう。明日はこういう材料がどれだけ、道具がどれだけ必要だと指示が出る。曾禰中條建築事務所は毎日、それらを手配して、清算して支払いをしたそうです。指示は全て英語で、時折、辞書を調べても理解できない俗語などもあって、意味をつかむだけで大変だったようです(笑)。



藤森 照信氏 (ふじもり てるのぶ)

撮影:浅岡 恵

1946年長野県生まれ。建築史家(専門分野は日本近現代建築史)、建築家(工学博士)。東北大学工学部建築学科卒業後、東京大学大学院博士課程修了。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。



旧郵船ビルディング

当時の日本では最大規模のオフィスビル。昭和40年代まで、東京駅前の都市景観を形づくる名オフィスビルの一つだった。

建築主	日本郵船株式会社
設計	曾禰中條建築事務所
施工	フラー社 (アメリカ)
敷地面積	1,410.45 坪
建築面積	1,218.93 坪
延床面積	8,438.53 坪
階数	地上7階、地下1階
着工	1920 (大正9) 年11月
竣工	1923 (大正12) 年5月26日
改築	1975 (昭和50) 年解体
所在地	東京都千代田区丸の内二丁目3番2号

鉄骨造によるオフィスビル建築と関東大震災

——鉄骨造のオフィスビルは、日本では普及しなかったようですが？

藤森 フラー社はアメリカ式の効率的、合理的な施工で、鉄骨造の丸ビルと郵船ビルをつくりましたが、両ビルは関東大震災 (1923年) によって大きな被害を受けました。郵船ビルは壁面に亀裂が入り、張石やテラコッタのひび割れ、剥落が著しかったようです。鉄骨の変位が大きかったことによる被害で、フラー社の耐震への考え方がなかったことが原因でした。アメリカは地震がないから、ハリケーンに対する耐性しか考えていなかったのです。

日本の建築家たちはちゃんと地震の揺れを計算して、鉄骨の太さをフラー社に指示していました。ただフラー社が、その指示より細い鉄骨を持ってきたわけですね。基本構造を決めた^{うちだ よしかず}内田祥三 (元東京帝国大学総長) は激怒したそうです。私は郵船ビルを解体する時に見ましたが、強度を増す工夫がいろいろされていました。でも、限界もあった。

——明治時代につくられた三菱一号館をはじめとする煉瓦造オフィスビル街は、関東大震災の被害が少なかったと聞きました。

藤森 それらの煉瓦造オフィスビルは、一つの入口に対して上まで貸す「棟割長屋」でした。一つのビルを4社で借りるとしたら、それぞれに玄関、階段、便所があった。このため壁が異常に多く、地震でも被害が少なかったのです。しかし、オフィスビルの命である「レントブル比 (面積当たりどれだけ貸せるかの比率)」は低かった。アメリカ式オフィスビルは「コアシステム」といって、真ん中に設備を置いて部屋だけを貸します。階段、玄関、エレベーター、水周りは共通にしてレントブル比を高めていました。当時は丸ビルのレントブル比が一番高かった。

関東大震災では銀座や浅草の煉瓦造の商業ビルが倒壊したため、その後、



煉瓦造ビルは規制されることになりました。震災復興時に、ビル建築の構造が鉄筋コンクリート造へ変わった。その過程に、合理的で効率的な鉄骨造のビル建築があったことはあまり知られていません。現在の超高層ビルは鉄骨ですが、鉄骨が再生するのは戦後ずっと経ってから。超高層の霞が関ビル(1968年)からです。

「煉瓦と石」から、「鉄骨とテラコッタ」へ

——最後にテラコッタについてですが、なぜ鉄骨造の郵船ビルにテラコッタが使われたのでしょうか？

藤森 アメリカ式オフィスビルに絶対に必要だったのがテラコッタでした。イギリス式オフィスビルを代表する「煉瓦と石」から、「鉄骨とテラコッタ」へ。これが、当時のオフィスビルの大きな特徴です。テラコッタは石に比べて軽くて、工業製品だから大量に作れる。これを石で刻んでいたら、いったい何十年かかるか。大量化、均質化、合理化の代表的製品としてテラコッタが使われたのです。

——郵船ビルも、たくさんのテラコッタが壁面を装飾しています。

藤森 遠くから見ると石に見えるでしょ。一般の人は石造だと思っていたかもしれませんがね。遠くから見る外装にはテラコッタを使いましたが、近くで見る内装には本石を使っていました。

——郵船ビルのテラコッタは、アメリカのグラッディング・マクビー社製です。

藤森 おそらく当時の日本には、これだけ大きなものを焼く窯も、狂いのないように焼き上げる技術もなかったでしょうね。

日本製の建築陶器（テラコッタ）の時代

——今回INAXライブミュージアムに設置された郵船ビルのテラコッタは、内部にコンクリートが充填されています。また、割れた部分をくっつけたような跡もあります。

藤森 竣工当初テラコッタは、鉄骨に針金で直付けされ、間にコンクリートが充填されていました。ただし、コンクリートに強度は期待していないのです。震災の時に一部のテラコッタは落下したし、亀裂が入ったものもたくさんあった。このため、復旧の際には鉄骨とテラコッタの間に、さらにコンクリートを充填したらしい。ミュージアムにきたテラコッタの割れた跡は、震災で落ちた時のものかもしれませんね。

——震災を機に建物が鉄筋コンクリート造になると、テラコッタが数多く使われるようになりました。

藤森 震災以後は、「タイル」と「テラコッタ」です。この時期から、日本でもテラコッタを焼き始めたのですね？

——はい。震災復興期、まさにこれから華やかに建物を装飾する「建築陶器」の時代が来るというので、常滑でもいくつかのメーカーが製作を始めました。日本のテラコッタ建築は、関東大震災から第2次世界大戦までの短い期間しかありません。当館のテラコッタパークで、それらを見ていただけます。

震災前に使われた郵船ビルのテラコッタは、日本が世界に学び新しいことを積極的に取り入れようと挑戦していた時代を象徴する宝物と考えています。

藤森 イギリス式からアメリカ式オフィスビルへという、建築の歴史を語るものでもあります。ぜひ大事に残してってください。

——はい。日本の建築史に残る大事なモニュメントとして、訪れる多くの人に日本の職人たちの思いを語りかけてほしいものです。

(2020年2月7日収録)



郵船ビル内部



A Legacy to Future Generations: Terracotta from the Old Yusen Building

Terracotta in the shape of storage jars that adorned the facade of the old Yusen Building, which was completed in 1923 in the Marunouchi district of Tokyo, will join the collection of the Terracotta Park of INAX Museums in the early summer of 2020.

What is the story behind the two American-made terracotta pieces?

The old Yusen Building was called “the finest American-style office building in Japan” by architectural historian Teijiro Muramatsu. Upon hearing it was to be rebuilt, Muramatsu asked for permission to record its demolition in 1975 and also requested that parts of the building be preserved for future generations.

Two terracotta storage jars from the original structure were used on the facade of the new Yusen Building which was completed in 1978. However, the jars showed increasing signs of wear and deterioration, and 40 years after their reinstallation, Nippon Yusen Kabushiki Kaisha, the company headquartered in the building, began looking for a new home for them. The terracotta jars were accepted into the collection of the INAX Museums. The architectural records on the demolition of the old Yusen Building noted that “Mass production, quality uniformity, and the rationalization of production were fully incorporated into every aspect [of the construction process] of the Yusen Building.” The report was written by Terunobu Fujimori, who was a graduate student at the University of Tokyo and is now an architectural historian and architect.

(Interviewer: Yasuo Goto, chief curator of INAX Museums)

From British- to American-Style Office Buildings

Yasuo Goto: What was the world of Japanese architecture like around 1923, when the original Yusen Building was completed?

Terunobu Fujimori: The Japanese economy was starting to grow, and demand for office buildings was strong. In the Meiji Era (1868-1912), Mitsubishi Estate Co., Ltd. built a British-style business district with red brick buildings in one part of the Marunouchi district. The opening of Tokyo Station in 1914 paved the way for the development of another part of the district connecting Tokyo Station and the Imperial Palace. However, the construction of old Tokyo Kaijo Building in this district took four and a half years to complete.

It was against this backdrop that the plans for the Marunouchi Building and the Yusen Building got underway. And herein lay the problem. The Marunouchi Building was to cover an area four times larger than that of the Tokyo Kaijo Building, and if conventional construction methods were used, an estimated eighteen years would have been needed for its completion.

Goto: Speed was of the essence then.

Fujimori: The builders were faced with the task of cutting construction time from eighteen years to just two or three years. At the time, high-rise buildings called skyscrapers were going up at a rapid clip in the United States, and a decision was made to hire the George A. Fuller Company, a New York construction firm, for the project. The Fuller Company was the leading US construction firm at the time, known for the numerous steel-frame skyscrapers it had built.

From Bricks and Stones to Steel and Terracotta

Goto: Why was terracotta used for the adornments on the steel-framed Yusen Building?

Fujimori: Terracotta was vital to steel-framed office buildings. The shift from British-style brick and stone to American-style steel and terracotta was a defining trend of the times. Terracotta weighs less than stone and can be mass-produced in factories. It would have taken decades to carve the required number of sculptures if they were made of stone. Terracotta was an ideal product because it could be produced in large volumes, with

Old Yusen Building



One of the largest buildings in the 1920s in Japan and a landmark in the area around Tokyo Station up to the 1970s.



Profile of
Terunobu Fujimori

Born in 1946. Architectural historian specializing in modern and contemporary architectural history of Japan and architect (PhD in Engineering). Professor Emeritus of the University of Tokyo. Director of the Tokyo Metropolitan Edo-Tokyo Museum.

uniform quality, and in mechanized plants.

Goto: Numerous terracotta pieces adorned the walls of the Yusen Building.

Fujimori: Seen from a distance, terracotta objects look like stone. People back then probably assumed they were stone. So terracotta was used on the exterior, where it would be viewed from afar, and genuine stone was used inside the building, where the objects would be seen more closely.

Goto: The terracotta of the Yusen Building was made by Gladding, McBean and Company.

Fujimori: Japan probably did not have large kilns or the technology to fire such huge objects and achieve the desired result.

Age of Japanese-Made Architectural Terracotta

Goto: The terracotta from the Yusen Building that recently arrived at the INAX Museums are filled with concrete. They also appear to have cracks that had been repaired.

Fujimori: During the Great Kanto Earthquake, some terracotta pieces were detached and many of them were cracked. When the building was repaired, concrete was used between the steel and terracotta as well as inside the terracotta for reinforcement. The cracks on the two terracotta pieces at your museums may have occurred when they were separated from the wall during the earthquake.

Goto: Numerous terracotta pieces were used on reinforced concrete buildings after the earthquake.

Fujimori: Tiles and terracotta appeared widely on buildings made after the earthquake. Is that about the time when the production of terracotta started in Japan?

Goto: Yes. After the earthquake, it was believed that opulent architectural pottery would be the trend of the times, and several manufacturers in Tokoname started making these pieces. However, structures adorned with terracotta in Japan were only built for a short time—from the Great Kanto Earthquake to World War II. These pottery works are on display at the museums' Terracotta Park.

The terracotta on the Yusen Building is indeed a heritage and symbol of Japan's determination to learn from the rest of the world.

Fujimori: The pieces mark the transition from British- to American-style office buildings in the history of Japanese architecture. Please take good care to preserve them.

Goto: We certainly will. We hope the pieces, which are monuments to Japan's architectural history, convey the passion of Japanese craftspeople to visitors

常設展示を一新しました。

古便器コレクション「デザイン性豊かな昔の便器」

Antique Toilet Collection: Historical Toilet Bowls and Their Vibrant Designs

世界のタイル博物館 企画展示室

人目をばかす空間で「ご不浄」とも呼ばれた昔のトイレ。江戸時代末から明治にかけて、便器はそれまでの木製から、衛生的で耐久性のあるやきもの製に変わっていきました。

染付で華麗な装飾が施されたもの、青や緑の釉薬が縦に、横に流し掛けられたもの。多彩なデザインの便器がつくれ、暗いトイレを華やかに飾っていました。

色や模様、形が多様で個性的な昔の便器を、豊富な収蔵品から選りすぐってご覧いただきます。



左から、掛分釉（青竹）朝顔形小便器【赤坂】と赤肌緑釉流掛向高形小便器【信楽】。撮影：梶原敏英

Enjoy our rich collection of unique old toilets that come in an abundance of colors, designs, and shapes.
Tile Museum, Exhibition Area, Permanent Exhibition

陶楽工房の新メニュー「グランツ・モザイク」

Glanz Mosaic: A new program at the Tiling Workshop (reservations required)

[予約制]

当館のタイル好きスタッフが考案した新メニューです。

「グランツ Glanz（ドイツ語）」には「輝き」「きらめき」という意味がこめられています。ご用意するタイルは、キラッと光ったり、真ん丸だったり、透き通る素敵な色だったり。タイル選びも楽しいスペシャルメニューです。制作した作品は、素敵なトレイや壁掛けミラーとしても利用できます。

当館が皆さまをお迎えできるようになりましたら、ぜひ実際に体験してみてくださいね。

Glanz means "shine" and "gloss" in German. Enjoy making attractive trays and decorative mirror frames using various tile designs.

形、色、艶、さまざまな表情を持つ
タイルをご用意しました。



見て、使って、飾って…
お部屋を彩るあなただけの作品を
作ってみませんか？

サイズ：20×20cm
料 金：2,800円（税込）
制作時間：約90～120分



テラコッタパーク 新展示

New acquisitions at Terracotta Park

日本郵船株式会社様から旧郵船ビルディング（東京丸の内ノ1923(大正12)年竣工、1975(昭和50)年解体）のテラコッタ2基の寄贈を受け、「テラコッタパーク」内に展示公開を予定しています。（関連特集P03-P07）



Two donated terracotta, which originally decorated the exterior of the old Yusen Building (1923), shall be displayed. (See feature story, pages 3-7)

光るどろだんご Shiny Clay Ball Workshop

夏のテーマ「小さな地球をつくろう!」

The Theme for Summer: Let's make a small earth

～8.31 Fri.

[予約制]



夏の定番です。私たちが住む星、地球。大切に、汚さないようにしたいですね。

地球の表情は、一時たりとも同じではありません。雲の流れ、海の色…今年も3種類の海の色を準備してお待ちしています。

どんな地球ができますでしょうか。

料 金：900円/個（税込）

お問合せ・ご予約：web、お電話 TEL0569-34-6858

MUSEUM SHOP

ミュージアムショップ

常滑焼急須

Tokoname ware teapot



常滑焼の注目若手作家「伊藤雅風」さん作、中国・宜興の急須の趣を感じる風格のある急須。ミュージアムショップでは、常滑焼のやきものも紹介しています。

16,000円（税別）



ミュージアムショップの商品を
オンラインサイトにて
ご購入いただけるようになりました。

<https://www.care-goods.lxil-online.com/house/ilm/>

素材の持ち味を活かした料理を提供する
Cuisine that captures
the full flavor
of the ingredients

pizzeria
la fornace

ピッツェリア ラ・フォルナーチェ



- ピッツァ
シラスのマリナーラ
- パスタ
シラスと水菜のオイル

伊勢湾で獲れたシラスの塩気と旨味がたっぷりのオイルパスタと、チーズを使わないトマトソースピッツァのマリナーラ。キリッと冷えた白ワインと最高に相性の良い2品で、夏を感じてください。

Lunch time: 11:00-14:30 L.O.
Café time: 10:00-11:00, 14:30-17:15 L.O.
Dinner time: 土・日・祝日 17:30-20:00 L.O.
水曜日休（祝日は営業）TEL0569-34-8266

陶楽工房 Tiling Workshop

新メニュー「メモリアルボード」

New program: Commemorative plaques

[予約制]



お世話になった方に、感謝の気持ちをこめて、手づくりのメモリアルボードをプレゼントしませんか。心のこもったタイルアートで母の日や父の日の想いを伝えましょう。

料 金：8,150円/1セット（税込）

サイズ：30cm×30cm

お問合せ：陶楽工房 TEL0569-34-6858

Report 01

光るどろだんご大会2019 中部地区大会

“Hikaru Dorodango”
Making shiny clay balls
Central Japan championship 2019

2019.9.16 Mon. 土・どろんこ館

👑 最優秀賞



尾上楓音さん
「花のワルツ」

👑 優秀賞



石原 玄さん
「金魚鉢」



若松奏佑さん
「いっぱい練習したよ」

全国大会への出場をかけて33名が競いました。今年は道具も大会側が用意する綿棒と歯ブラシに限り、どろだんごづくりの基本「削り・色付け・磨き」の3つの工程を丁寧に行うなかで、いかに自分らしい光るどろだんごを完成させるかを競う大会となりました。大会経験者、初心者、そして親子やきょうだい、家族全員での参加もあり、世代を越えて真剣勝負する姿が見られました。

最優秀賞は、「楽しそうに取り組んでいた」と審査委員長の三木きよ子先生も評した尾上楓音さんの作品。上位3名と光るどろだんごマイスター2名が全国大会に出場します。



With 33 participants, the central Japan regional championship was one of the most competitive in the country. The entrants, who were of all ages and included previous competitors, beginners, parents and children, brothers and sisters, as well as whole families, threw themselves into creating fantastic shiny clay balls so they could earn a place in the national championship.

Report 02

第10回「陶と灯の日」 The Tenth Pottery and Lamp Day

2019.10.10 Thu.

世界のタイル博物館 講義室、テラコッタパーク、窯のある広場、どろんこ広場

故伊奈長三郎氏の命日10月10日に開催される「陶と灯の日」が10周年を迎えました。当館も全館を一日無料開放するとともに、さまざまなイベントを開催しました。



午後4時から特別企画「常滑焼の明日を想い夢を語る」シンポジウムの開催。基調講演「陶業の家に生まれて」では、長三郎氏の三男である伊奈輝三氏が、私利私欲がなく新技術に対して好奇心旺盛な父の人となりや、「事業は社会のため」という事業観などを語りました。続くパネルディスカッション「常滑の未来を語る」では、常滑焼業界関係者たちが、魅力ある常滑の陶芸・陶業の歴史を未来につないでいく試みについて意見交換をしました。

午後5時、テラコッタパークの夜間ライトアップが始まりました。窯のある広場には、伝統工芸士の指導の下、西浦北小学校、西浦南小学校、小鈴谷小学校の児童76名と地元の作家や職人が制作した陶製のランプシェード1300



個が並んでいます。午後6時、カウントダウンに合わせていっせいにLEDが点灯。あちこちから拍手と歓声が上がります。

常滑焼の歴史や先人の功績に思いを馳せ、常滑の伝統・文化を次世代へ引き継いでいく「陶と灯の日」。新たな歴史の幕が上がりました。

※「陶と灯の日」：毎年10月10日、故伊奈長三郎氏（伊奈製陶創業者・初代常滑市長）の命日に開催。常滑焼の歴史を築いた先人に感謝し、未来に希望を託す一日。

INAX Museums marked the tenth Pottery and Lamp Day with an array of events and by opening its facilities to the public free of charge. Pottery and Lamp Day is held every year on October 10, the anniversary of the death of Chozaburo Ina, the first mayor of Tokoname City and the founder of Ina Seito Co., Ltd., the predecessor of LIXIL.

Report 03

「れんがDEどーもくん!」 巡回展示

Traveling Exhibition
with a Brick Rendition of NHK's Domo-kun

2019.10.10 Thu.

煙突テラス

NHK 愛知発地域ドラマ「黄色い煉瓦〜フランク・ロイド・ライトを騙した男〜」のイベントとして陶楽工房のワークショップで制作したタイル作品が、NHKのキャラクター「どーもくん」に組み立てられて巡回展示。当館にもやってきました。



Bricks with drawings etched onto their surface by participants at the Tiling Workshop were assembled into the shape of Domo-kun, the official mascot of NHK, Japan's public broadcasting corporation. The exhibit was shown at a number of venues.

Report 04

窯のある広場・資料館 オープニング記念式典 Opening Ceremony of the Kiln Plaza

2019.10.4 FRI.
窯のある広場・資料館



国の登録有形文化財（建造物）に登録され、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されている「窯のある広場・資料館」が3年にわたる保全工事を終えて、リニューアルオープン。雲一つない秋空のもと、伊藤辰也常滑市長をはじめとする来賓をお迎えして記念式典を行いました。

創建から90余年を経た窯と煙突の保全工事は、やきもののまち・常滑に息づく「ものづくりの熱」の記憶を、さらに50年、100年先の後世に伝えることをめざし、外壁の仕上げや瓦の風合いにもこだわって、できる限り当時に近い姿を残しています。

式典に続く内覧会では、かつての窯焚き作業の様子を再現した「窯プロジェクトマッピング」をはじめとする新しい展示や同時開催の企画展を楽しんでいただきました。

After three years of historic preservation work, the Kiln Plaza opened with new exhibitions. Tokoname City Mayor Tatsuya Ito was among the honored guests who attended the event.



Report 05

窯のある広場・資料館リニューアル記念 企画展 大「名品」展 —タイル・テラコッタ・古便器・土管のコレクション Objet d'art collection —tiles, architectural terracotta, and assorted ceramic wares

2019.10.5 Sat. ~ 2020.3.31 Tue.
土・どろんこ館、世界のタイル博物館 企画展示室を中心に館敷地内

INAXライブミュージアムの膨大なコレクション。その第一号が窯のある広場・資料館です。常滑のやきものの歴史を語るシンボルとして「後世に残したい」という思いから改修・整備し、1986年、一般公開を開始しました。そのリニューアルオープンを機に、これまで展示する機会が少なかった貴重な「名品」を収蔵庫から出して見ていただくという企画展。約120点を土・どろんこ館、世界のタイル博物館を中心に敷地内に展示しました。国宝や重要文化財はありませんが、どれも人の暮らしを豊かにしようという、ものづくりの心が宿ったものです。訪れた人たちは、マップ片手に敷地内を散策しながら「名品」探し。多彩なコレクションとの出会いを楽しみました。



This exhibition featured approximately 120 invaluable items not normally displayed from INAX Museums' extensive collection. The visitors enjoyed their encounter with these precious works.

Report 06

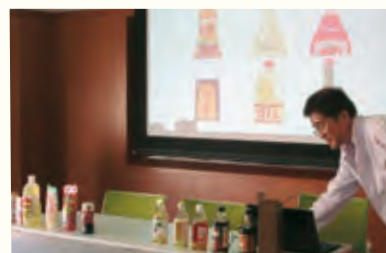
お酢を使って 「スケルトン玉子」をつくろう Let's make naked eggs using vinegar!

2019.9.7 Sat.
世界のタイル博物館 講義室



知多半島とその近郊の産業博物館・美術館、計7館による「五感を刺激するミュージアムスタンプラリー」企画の一つ、「MIZKAN MUSEUM」（半田市）とのコラボレーション・ワークショップです。MIZKANといえば「酢」。クイズや実験で知る「お酢の話」「お酢の科学」。玉子を酢に浸すと、殻が溶けてプヨプヨした「スケルトン玉子」になるのはなぜ？牛乳に酢を混ぜるとチーズができるのはなぜ？などなど。「エエッ?!」「ナルホド!」と、酢が持つ不思議な力を楽しく学びました。

Why do eggs soaked in vinegar turn into rubbery "naked eggs" without shells? Participants learned about the power of vinegar through quizzes and experiments in this event, which was held in collaboration with MIZKAN Museum in Handa City.



Report 07

光るどろだんご全国大会2019・ どろだんごEXPO at セントレア “Hikaru Dorodango” Making shiny clay balls National championship 2019

2019.11.3 Sun.

中部国際空港セントレア イベント広場

主催：LIXIL 共催：中部国際空港



第12回目の開催となった「光るどろだんご全国大会」。24都道府県32会場の地区予選を勝ち抜いた代表27名が光るどろだんごづくりの腕を競いました。サポーターは約60名。「どろだんごマイスター」3名も参加してお手本を見せました。

会場は、観光スポットとしても大人気の中部国際空港セントレア。たくさんの来場者が、大型スクリーンに映し出される選手たちの制作風景を興味深く見たり、同時開催の「どろだんごEXPO」のアトラクションに参加したり。光るどろだんごと、その魅力を知っていただけました。

最優秀賞は、京都会場代表の川本千賀子さん。「むずかしい白土を何回も塗って磨き、真珠の光沢を出しました」と、審査委員長の三木きよ子先生。「大勢の人がいる緊張のなか、みなさん、最後まで心を込めて楽しく作ってくれました」と、総評してくださいました。

A total of 27 people who won top places in the preliminary competitions, held at 32 venues in 24 prefectures, competed to make shiny clay balls at the all-Japan National Championship. The 2019 championship also featured a demonstration of the shiny clay ball creative process by three Clay Ball Meisters.

最優秀賞 川本千賀子さん 兵庫県 「大地の真珠」	優秀賞 尾上楓音さん 愛知県 「春待つ日」
LIXIL賞 浪内奏輔さん 北海道 「金星」	
セントレア賞 伊波希星さん 沖縄県 「南国の海」	
三木きよ子 審査員長特別賞 若松奏佑さん 愛知県 「めざせ!ピッチング160キロ!」	
どろだんごEXPO賞 桑原清乃さん 岡山県 「ハロウィンの思い出」	



Report 08

企画展開連イベント 講演会&館内ツアー 私が選ぶ、 INAXライブミュージアムの 『名品』

Lecture and tour of the exhibition
“My selection of the very best
from INAX Museums collection”

2019.11.23 Sat.



ら、縄文土器から始まる日本のやきもの史を概観する内容で、やきもの好きには至福の時間となりました。

A museum tour and lecture on the masterpieces of the INAX Museums collection was given by Yumi Mori, a well-known ceramic researcher. The participants listened intently as Mori, based on her vast knowledge and experience, provided insights on how to appreciate fine ceramic works.

テレビ番組「なんでも鑑定団」でもお馴染みの陶磁研究家、森由美さんを迎えて、まずは館内ツアー。企画展示室に並んだ陶製の狛犬やテラコッタ、レリーフタイルに「名品展ならではのラインナップです」。釉の色の出方や文様の中に何が描かれているか、見どころのポイントを解説。参加者は、染付の大皿や鉢を見続けた専門家が、名品のどこを見るか、熱心に耳を傾けました。その後の講演会では、名品展に触れなが

Report 09

世界トイレの日特別企画

「トイレはどこ? at INAXライブミュージアム」

Special event for World Toilet Day “INAX Museums’ ‘Where Are the Toilets?’ Event”

2019.11.15 Fri.-19 Tue. 主催：LIXIL

11月19日は国連が制定する「世界トイレの日」。世界にはプライバシーのない場所で排泄したり、劣悪な衛生環境に直面する国がたくさんあります。水まわり製品分野で世界をリードするLIXILはこうした状況を踏まえ、技術と専門知識を生かして衛生問題の解決に取り組んでいます。今回のイベントでは、中部地方初となる「シースルートイレ」を展示、屋外排泄を疑似体験。世界の衛生課題やトイレについて学ぶスタンプラリーも実施しました。

November 19 was designated World Toilet Day by the United Nations. An event was held to raise awareness about the many places in the world that are plagued by poor sanitary conditions and the threat this poses to people's health.



◎そのほかの催し

窯のコンサート vol.20

2019.10.27 Sun. 「土・どろんこ館」
ヴァイオリン/森本千絵、ギター/野村芳生

内藤敏子の奏でるチターのタペ IN TOKONAME 第9回

2019.11.9 Sat. 「世界のタイル博物館」
チター/内藤敏子、リコーダー/大竹尚之、
ギター/青戸久男

第22回

ムジカセラミカ定期公演 in 常滑

2019.12.22 Sun. 「土・どろんこ館」

museum collection

ミュージアムコレクション

51



木製の室内便器

The portable wooden toilets for indoor

20世紀前半に作られた木製の移動式室内便器。非水洗式だった当時の便所は母屋から離れた場所に設けられることが多く、子どもや病人のためだけでなく夜間の用足しに、携帯用の便器が買い求められたのです。洋家具店や医療器具店などは木工職人や大工らと衛生的で快適な便器を考案し、販売しました。

『伊木式室内便器』(右)は持ち手が手前に倒れコンパクトに収納できるほか、「蓋を畳み起こして開けられ移し置く必要が無いので、不潔にならないのが特長」と謳い、『井川式室内便器』(左)も「持ち手の前面に引戸付きの棚を設け、防臭剤やちり紙などを入れられるようにした。ピロード布地の便座は取り外せるので掃除に便利で衛生的なうえ、手前に傾く持ち手に寄りかかって用を足すことができるので身体に苦痛なく有益」と、多彩な工夫を特許申請書に挙げています。

Iki-style and Igawa-style portable wooden toilets for indoor use were invented in the first half of the twentieth century. Western furniture manufacturers and medical equipment producers collaborated with wood craftsmen and carpenters to invent hygienic and comfortable toilets and applied for patents for their innovative ideas.

右) 資料名:「伊木式室内便器」

●サイズ: 567(折畳時345)×250×527mm ●製作地: 兵庫県 ●実用新案特許登録: 大正8年

左) 資料名:「井川式室内便器」

●サイズ: 590(折畳時398)×315×550mm ●製作者: 井川兄弟商会製造(同形の別資料には「井川洋家具商会製造」のタグ)

●製作地: 大阪市 ●実用新案特許登録: 明治41年(「井川式高等便器」で取得)



INAX ライブミュージアム

〒479-8586

愛知県常滑市奥栄町1-130

TEL.0569-34-8282 FAX.0569-34-8283

<https://www.livingculture.lxil/ilm/>

開館時間——10:00am~5:00pm(入館は4:30pmまで)

休館日——水曜日(祝日の場合は開館)、年末年始

共通入館料——一般:700円、高・大学生:500円

小・中学生:250円(税込、各種割引あり)

交通——<バス>

●名鉄線「常滑駅」または中部国際空港より
知多バス「知多半田駅」行き
「INAXライブミュージアム前」下車徒歩2分

<お車>

●名鉄線「常滑駅」より約6分
●中部国際空港より約10分
(セントレアライン「りんくうIC」降りる)
●知多半島道路「半田IC」より約15分
●セントレアライン「常滑IC」より約7分
(乗用車・バス駐車場完備)

INAX MUSEUMS

1-130 Okuei-cho, Tokoname-shi,

Aichi Prefecture 479-8586 Japan

<https://www.livingculture.lxil/en/ilm>

Hours:

Open (Museum & Shop): 10:00-17:00

(Last entry:16:30)

Closed: Wednesdays (Open if the Wednesday is a public holiday), New Year holidays

Admission Fee (tax inc.):

Adults ¥700

High school and college students ¥500

Elementary and junior high school students ¥250

Access

By Bus:

From Meitetsu Tokoname Station or Centrair Central Japan International Airport, take Chita Bus bound for "Chita Handa Station". Get off at "INAX Live Museum-mae". Two-minute walk from bus stop.



* INAXライブミュージアムはLIXILが運営する文化施設です。 * INAX MUSEUMS is operated by LIXIL Corporation.

カ-29-50 [2020.6.10]

